



国境なき医師団報告書

2001年8月27日

アフガニスタン

目次

1. 歴史的背景、医療及び人道援助の現状
2. アフガニスタンでの国境なき医師団の活動
3. アフガン難民の証言（イラン・グルシャールにおける国境なき医師団の調査より）
4. イラン・グルシャールにおけるアフガン難民の実態調査

1. 歴史的背景、医療及び人道援助の現状

歴史的背景

1979年、ソ連による軍事侵攻が始まった。10年に及ぶ抵抗の末、共産主義体制に反発するムジャヒディーン（イスラム聖戦士）はアメリカ、パキスタンやサウジアラビアの支援を受け、ソ連を追放する。しかし、異なる民族や宗派のムジャヒディーン同士で内戦が首都カブールで生じ、多くの国民がイランやパキスタンに逃れた。1994年、パキスタンで組織されたイスラム原理主義を掲げる新興武装勢力、タリバンが南部を制圧し、その2年後には首都カブールを陥落。マスード将軍の北部同盟支配下地域バダフシャンとパンシールを除く、国土の9割を支配する。2000年末、タリバンが反タリバン連合の戦略的要衝である北部タカルの州都タロカンを制圧した。それによって反タリバン連合は主な物資補給路を失った。



タリバンはコーランの厳しい解釈をすることで知られている。アメリカやロシアとの関係は緊迫しつつあり、国連安保理はタリバン側に対し国際テロの黒幕、ウサマ・ビン・ラディン氏の身柄を第三国に引き渡すよう要求したがタリバンが応じなかったため、制裁が強化された。

面積： 65万2000km²
人口： 2140万人
独立日： 1919年10月9日
政体： イスラム国
人種： パシュトゥーン人（約半数）、タジク人（30%）、ハザラ人、ウズベク人他

医療及び人道援助の現状

アフガニスタンの食糧事情は悪化する一方である。世界食糧計画（WFP）によって必要とされる食糧の3割が援助されている。しかし、援助の配給システムが不十分なため、このわずかな食糧も各地へ供給することが不可能となっている。既に50万もの人々が隣国イランやパキスタンなどへ流出している。タリバン政権がケシ栽培の禁止を命じて以来多くの国民は重要な収入源を失っている。20年に及ぶ内戦の影響でアフガニスタンの保健制度は最低限のものでしかない。呼吸器系疾患、はしか等の伝染病、破傷風、ポリオやコレラが頻繁に見られる。

また、アフガニスタンの女性は教育や医療を受ける権利を侵害されており、職業を持つことも禁じられている。アフガニスタンの妊産婦死亡率は世界で2番目に高いとされ、ユニセフによれば女性1000人のうち17人は出産中、あるいは直後に死亡する。また5歳以下の幼児死亡率は1000人に257人という高さで、世界で5番目とされる。

1999年には現地で活動を行っていたいくつかの国際援助団体が、資金不足からアフガニスタンを去り、同年10月に国連により課せられた制裁の結果、国内へ物資を届けることが非常に困難になっている。

- ・ 幼児死亡率(1歳以下): 1000人のうち151人(1995~2000年)*
- ・ 平均寿命: 45.5歳(1995~2000年)*
- ・ 医師の数: 7,143人につき1人の医師(1993)*
- ・ 飲料水: 国民の6%にしか安全な飲料水がない(ユニセフのデータによる)
- ・ 国内避難民: 約50万人(3分の1が難民キャンプで暮らす)
- ・ アフガン難民: 280万人*(主にパキスタンとイランに避難)

*L'Etat du Monde 2000, edition la Decouverte 参照

2. アフガニスタンでの国境なき医師団（MSF）の活動

MSF は 1979 年のソ連軍侵攻時よりアフガニスタンで活動を始めた。当時、MSF のボランティアは政府の許可のないままアフガニスタンに入り、医薬品を供給していた。その後、内戦が続く中で、2 度の中断を余儀なくされた。1 度目は北部のバダフシャンで MSF ボランティアのロジスティシャンが殺害された 1990 年、2 度目は 1998 年アメリカがテロリストの軍事基地と判断した



場所を爆撃した時である。この時は MSF をはじめ全ての人道援助団体がタリバンによって追放された。1996 年以降タリバンが台頭してきてから、女性は医療を受けることを禁じられている。

現在、常時 70 人のボランティアがタリバン支配地域、反タリバン勢力支配地域の両方で医療援助活動を行っている。アフガニスタンの各地の病院やクリニックで栄養失調の子どもへの栄養補給、ワクチン接種、特に女性患者の診察、結核治療、リーシュマニア病治療、現地スタッフへのトレーニングなどを行っている。また隣国のパキスタンやイランでも、内戦、飢饉、一般市民への暴力のため避難してきたアフガン難民の援助も行っている。

タリバン支配地域

・カブール

1998 年 7 月、タリバンによって MSF をはじめすべての人道援助団体はカブールから追放された。その後 MSF は 1999 年 1 月より、戦闘を逃れた避難民が集まる地域の 2 つのクリニックで活動を再開した。タリバンの政策によって女性が医療を受けることが制限されている中、女性スタッフと共に、特に女性患者の診察、基礎健康管理を行っている。1999 年夏、コレラの流行時カブールの数ヶ所の病院でも緊急援助を行った。

・ガスニ

1995 年よりガスニ病院で入院・外来患者の治療、医薬品や医療器具の供給、栄養補給プログラム、病院の修復などを行っている。ガスニ近郊では 1996 年に結核対策プログラムを開始した。現在も 70 床以上ある病院で治療を続けている。

・ハザラジャット地方

2 つのクリニックで主に基礎健康管理を行っている。

反タリバン勢力支配下にある地域

・パンシール溪谷

反タリバン勢力のマスード派の支配下にあるが、政治・軍事面とともに非常にもろい状態にある。MSFは1997年より活動を行い、この孤立した地域に住む人々の健康管理や緊急を要する患者の処置を行っている。99年カブール北部のショマリ平野で大規模な戦闘が起きた際、溪谷内に多くの避難民が逃げ込んだ。2つの病院と2つのクリニックで、医薬品の供給、はしかの予防接種や飲料水の供給、衛生管理 及び医療スタッフの教育、医療システム改善を行っている。

・バダフシャン

1990年から中断を余儀なくされていたが、約10年後、活動を再開した。2つの施設で医薬品の供給と使用法の合理化、病院の衛生管理、などの活動を行っている。複数の武装勢力の争いにより、治安の悪化、政情不安が続いている。

イランのアフガン難民

イランは現在約150万人のアフガン難民を抱えている。20年に及ぶアフガニスタンの内戦が始まって以来、干ばつや民族差別から逃れるアフガン難民のイランへの流入が続いている。アフガニスタンではイスラム教シーア派を信仰するハザラ族の人々はタリバンによる弾圧の対象となっている。シーア派が国教であるイランへハザラ族の多くが逃れてくる。当初、イラン政府の難民に対する態度は寛容であったが、90年代に入り国内の経済悪化によって政府は厳しい政策をとるようになる。1992年以降、難民への身分証明書発行はほとんどなくなり、かわって強制送還されるようになる。不法滞在する難民の数は増加の一途をたどり、多くの者が不安定な生活を送らざるを得ない状況となっている。

・マシャド

MSFは1995年からイランで活動をつづけている。MSFが援助の対象としているのは主に不法滞在者として扱われているアフガン難民5万人。不法滞在者は難民全体の75%以上にのぼる。イランの北東部にあるマシャド郊外のグルシャルという町のクリニックとその周辺地域で移動診療活動を展開。

3. アフガン難民の証言

(イラン・グルシャルにおける国境なき医師団の調査より)

証言1．迫害

(オルツガン州デクンディ地区サングエタフト村からの家族)

今から6ヶ月ほど前、タリバンが村に侵入し、家々を搜索した。自宅に「モール」(シーア派の祈禱に用いられる石)があるのを発見したタリバンは、その家の男性を山の冷たい川の中に5時間立たせた。男性は体調を損なったが、それにもかかわらず隣のゴウル州での戦闘に送られた。彼には戦う意志もなく、病気だったため脱走したが、タリバンにつかまって連れ戻された。そして再び男性を冷たい川の中へ立たせた。

このような虐待ののち彼は重病を患い、治療のためカブールに行くことを決意した。彼はいくつか検査を受けたが、適切な治療は受けられなかった。腎臓障害があり、両足は浮腫により腫れているためまともに歩けず、もう農民として働くことはできない。

カブールに2ヶ月間滞在して村に戻った時、自分の家以外はすべて焼け落ちており、住民たちはイランやパキスタンへ逃げていた。家族は男性を待っていたが、タリバンにウシを取り上げられ、村の土地はクシ(パシュトゥーン人の遊牧民)の家族らに配分され始めていた。

彼らの財産は日に日に減り、タリバンによる被害も受けたため、村を出てイランへ行くことを決意した。

証言2．干ばつ

(ゴウル州チャグチャラン近くのサントウ村に住んでいた家族)

世帯主は農業に従事していた。昨年干ばつの影響を受けたが、まだ家畜が十分おり、翌年は良くなるだろうと期待していた。しかし昨冬もこの春も雨は降らず、作物は育ち始めたもののすぐに枯れてしまった。

他の村では、井戸を掘るための援助を国連から受けた。水を探すのに20mも掘り下げなければならなかったのに、井戸は2ヶ月後に干上がった。水不足で食べる草がなくなりたくさんの牛が死んだ。彼は牛が死んでしまう前に自分の手で殺し、食糧の足しにした。村人の一部は市場へ行き、羊や牛が死んでしまう前に売ったが、肉の価格は非常に低く、たいした金額にもならなかった。

夏の終わりになっても状況はよくならなかった。妻は臨月も近く、冬には皆死んでしまうのではないかと恐れたこの家族は2人の年長いた母親とともにヘラートへ逃げた。そこで妻は出産したが、赤ん坊は翌日死んだ。彼は避難民キャンプへ出かけたが、長時間並んで待ったあげくに受け入れを拒否された。このキャンプの責任者がシーア派を援助したがないのだという噂があった。その後、密入国仲介人を見つけてイランへと国境を越えた。

証言 3 . イランへの道のり

(バルフ州マザール、アリチャパンからの 12 人からなる 3 家族)

幼い子供や臨月間近の女性、年老いた祖母がいたため、彼らの旅は困難なものであった。そして常にタリバンに見つからぬようにしていなければならなかった。

イランへ連れていってくれる仲介人をヘラートで見つけ、ザーボルまでたどり着いた。紹介された家で 10 日間過ごし、1 人 1 泊 3,000 トーマーン(4 ドル)と越境の代金 1 人あたり 100,000 トーマーン(125 ドル)の支払いを仲介人に請求された。彼らには宿泊代しかなかったため、マシャドについたら残りを支払うようにと仲介人は言った。ザーボルから仲介人とともに小型バスに乗り、運転手に 75,000 トーマーン(94 ドル)を要求された。しかし検問所で警察に全員逮捕され、仲介人とともにザーボル経由でアフガニスタンに強制送還された。

今回、同じ仲介人が夜間に徒歩で国境へと案内した。ザーボルでは前回と同じ家に滞在した。そこで、妊娠中だった女性が戸外の壁の裏で出産した。100 人以上のアフガン人がザーボルにおり、イスファハン、クオム、テヘランへ移送されるのを待っていた。

今回仲介人は、男性の兄弟 2 人と子供の 1 人を人質に取った。仲介人は 5 人づつグループ分けをし、何台かのイランの定期バスに全員を乗せた。運転手はまたもや 1 人あたり 40,000 トーマーン(50 ドル)を要求した。40 日の旅を経てようやくイランのマシャドにたどり着き、12 人が落ち着ける 2 部屋を見つけた。

すでに所持金はなく、仲介人と運転手らに 2,025,000 トーマーン(2,500 ドル)の借金がある。

4. イラン・グルシャールにおけるアフガン難民の実態調査

国境なき医師団（MSF）は1996年以降、イラン西部マシャド郊外グルシャールの診療所でアフガン難民の健康管理を行ってきたが、2000年後半に入り、新たに到着する避難民の数が急増している事実に着目した。そこで、アフガニスタンの現状と難民保護の必要性を明らかにするため、グルシャールに新たに逃れてきた難民の証言をもとに、彼らがなぜ祖国を離れなければならなかったのかについての調査を行った。以下はMSFの調査レポートを抜粋したものである。



アフガン難民を診察する
永井真理子医師
2000年 イラク・マシャド
(c) Didier Lefevre/MSF

*注）本調査の方法について

2000年9月2日から2001年1月17日までの約5ヶ月に754家族が新たな避難民として確認された。彼らは診療所を訪れて来たかMSFが家庭訪問をした家族で、イラン到着後6ヶ月以内である。このうちの570家族に面談を行なった。

明確に比較できるように出身地、家族の年齢層、到着してからの期間、全体的な生活環境、故国を離れた理由、イランまでの道のりの一般的な傾向について、各家族に同じ質問をした。

アフガニスタンで何が起きているのか？ - イランへの避難の理由

理由1) 迫害の被害、迫害への恐怖

迫害の被害と迫害への恐怖は、イランに難民として逃れる最も主要な理由である。56%の家族がこの理由に該当した。これらの被害者の村は、戦闘地区に位置していることが非常に多く、タリバンが攻撃、支配する以前は、反タリバン北部同盟の兵士に占領されていた。村が爆撃や計画的破壊行動を受けて自宅を燃やされた、破壊行動の際村は略奪され、一般市民が大量虐殺された、などの事例が報告されている。宗教の違いによる迫害の事例もいくつか報告された。シーア派の聖職者は拘束を受け、殴打されたり殺されたりした。殴打された後、スンニ派の儀式に従って無理やり祈祷させられた者もいた。ヨウジャン州アブホールでは昨春、モスクで人々が祈りを捧げていた際に、タリバンによる大量虐殺が行われた。

戦闘地域の村々は相次いで北部同盟の手中に陥落し、その後タリバンの支配下に移っていた。村長は、両勢力から相手側を支援したのではないかと疑われることが多かった。そのような場合、村長はいやがらせや迫害を受けた。戦闘員や反タリバン勢力との関わりを疑われた家族は、そのために被害を受けた。タリバンは家族の男性メンバーを拘束し、他の親族を殴打したり殺したりした。牢獄では容赦ない尋問、殴打、拷問が行われた。死亡したり、障害者となったり、いまだ行方不明の者もいる。

このカテゴリーに分類された家族は、親族が現戦闘員や元戦闘員であると述べた場合が多かった。戦闘員の親族自身は、必ずしも戦闘に関わっているわけではないが、隣人に密告されたり、反タリバン勢力を支援しているという疑いを抱かれたりして、タリバンによる被害をしばしば受けていた。

反タリバン勢力への参加や税金の支払いを拒否して、反タリバン側からの被害を受けた家族もいた。家畜に対する税金は現物支払いで、しばしば値上げされ、干ばつのため支払えない家族がますます増えていった。

避難家族らは、タリバンが定期的に訪れては武器を捜したり、戦闘員に関する情報を収集した様子について述べた。その際、威嚇、暴力を伴う尋問、脅迫、独断的な税金の徴収、略奪が行われることもしばしばであった。

軍への強制入隊も悩みの種であった。昨年、ハザラ共同体においてタリバンによる突然の強制入隊推進運動が行われたと、多くの家族が述べた。14歳以上の成人男性や若者が標的となった。

ハザラ人男性はたいてい戦闘最前線へと送られた。さらに同じ人種、宗教に属する反タリバン戦闘員と戦われるに及んで、状況は耐え難いものとなったと思われる。彼らは強制入隊を避けるため、自宅や遠く離れた山中に何週間、何ヶ月も潜伏した末に、家族とともに他国へ逃れることを決意していた。徴集兵の中にはタリバン軍を脱走し、そのまま他国へ逃れた者もいた。すでに成人男性を失っていた家族は、若い息子たちが強制入隊させられると、さらなる一家の働き手を失うため、それを免れるために国外へ脱出することを決めた。

牢獄から釈放されたことのある男性たちは再び拘束されることを恐れ、たいていは家族とともに国外へ逃亡した。虐待後の抑鬱状態に伴う心的外傷後ストレス症候群の徴候を示す者も何人かいた。ただハザラ人であり、シーア派であるというだけで投獄され、裁判も判決もなく1年以上監禁された者もいた。

アブホールから来たある家族らは、タリバンによると思われる地域女性の誘拐が起こり、娘を守るためにイランへ来ることを決意したという。

理由 2) 戦闘の被害者

この分類には、戦闘という状況下で家族の一員や財産、生活の糧を失ったためにイランへ来た、戦線に近い場所に住んでいたため移動せざるを得なかった、地雷の爆発による負傷や被害を受けた家族などが含まれる。11%がこのカテゴリーに入った。戦闘の最中に家や家畜、働き手を失った家族にとって、干ばつは国外脱出に追い討ちをかける原因であることも多かった。

理由 3) 干ばつ

21%は干ばつによる被害を受けた家族で、そのほとんどは家畜を失ったことが大きな打撃になった農民またはかつて季節的農作業に依存していた非雇用者である。干ばつの影響は、それが主たる理由であれ二次的理由であれ、ここ数ヶ月で着実に増加しており、とくに11月以降顕著であ

る。実際、冬以前にイランへ来ていた家族には事前対策の感があったが、冬になってからやってきた新たな避難家族は、食糧不足でやむをえず国を離れたというのが主な理由のようである。

二次的理由として干ばつを挙げた家族も 15%いる。これらの家族の第一の理由は、タリバン戦闘員そしてときには反タリバン勢力による迫害や被害に対する恐れであった。タリバンおよび反タリバン勢力によって家畜への高額課税を現物徴収されたり、家や村が破壊されるなどの被害をこうむった家族はやむなく別の村へ逃げたが、彼らをかまった現地の家族にはさらに負担をかけることになった。襲撃を避けるため急いで山中へ逃げなければならない場合も多く、干ばつの影響で生活状況が悪化して耐えられなくなるまで、洞窟や小屋などで数ヶ月暮らしたり、野草を食べたり、村から村へと物乞いに歩いたりという生活が続いた。他州に定住してもタリバンによって反勢力地域から来たことが知られるのを恐れ、生きのびるために国外へ出ることを最終的に決意していた。

理由 4) 経済的理由

老人や未亡人、世帯主が障害者であったり、単純に最低限の収入を求めている家族など、社会経済的にとくに弱い人々の主たる理由は経済的な問題である。この理由で国を離れた家族の多くが、さまざまな度合いで干ばつの影響を受けていた。多くの農民の購買力が欠如したため全体的な貨幣流通が低下し、小売店主の経済状況にも直接影響が現れている。

こうした中には未亡人や働き手を失った女性が含まれる。世帯主や一家を支えていた親族が最近になって拘束や投獄されたり、強制入隊させられたり、戦闘で殺されたりしたため、働いて家族を養うことができない。ほとんどの場合、タリバン当局は行方不明の親族に関する情報を提供しなかった。親族男性の援助を受けられない女性の多くは、生き延びるために次々と所持品を売るしかすべがない。

***注・避難理由の分類について**

避難理由は、「迫害の現実的被害」、「迫害の恐怖」、「戦闘の被害」、「干ばつ」、「経済的理由」、「その他」の6つに区分した。大部分の家族にはイランにきた理由は複数あることが多く、相互に絡み合っている。聞き取り調査では様々な状況を考慮しつつ、主要原因と二次的原因とに区別し、分類した。

イラン入国の主たる原因として：

「迫害の現実的被害」を挙げた家族・・・17%

「迫害の恐怖」を挙げた家族・・・39%

「戦闘の被害」を挙げた家族・・・11%

「干ばつ」を挙げた家族・・・21%

「経済的理由」を挙げた家族・・・7%

「その他」を挙げた家族・・・5%

どのようにしてたどり着いたのか - イランへの道のり

ほとんどの家族はアフガニスタンを離れ、危険で長い旅に出た。自力で旅の準備ができた家族は、数週間かけて所持品を売って旅費を作った。村が襲撃された家族は、所持品を持ち出すことができないまま、急いで住居から立ち去らなければならないことが多かった。国内避難民となって何週間、何ヶ月と山中で過ごし、野で手に入るものを食べたり、村から村へ食糧や寝る場所を求めて歩いた者もいた。

旅に出るとまず、幹線道路に出て交通手段を得るために、何日も歩かなければならないことが多かった。ハズラジャートの高く雪深い峠も越えなければならなかった。

女性や子供を伴い、悪条件の中で旅をすることもたびたびであった。イランにたどりつくまでに病死した者もいた。旅の途中で出産する女性もいた。中程度の栄養不良が見られる子供が何人かいたが、その割合は危機的なほどではなかった。12月以来、これらの家族の中で、本国にいる時にワクチン接種を受けなかった子供に、はしかが定期的に発生した。

出発からマシャドまでの旅は、平均して3週間以上かかった。ヘラートからの家族は4日でイランにたどり着いたが、ダールエスフやヨウジャンからの家族はイランまでもっとも長い旅をしており、出発から1ヶ月かかっていた。戦闘地域から来ていたり、グループの中に元戦闘員がいた場合は、より慎重に都市や幹線道路を避けて昼夜を問わず何日も歩いた。

多くの家族がヘラートを通り、そこで2~3日滞在したが、それは国境を抜けるための手はずを整えるために最低限必要な時間であった。ほとんどの者はヘラートでも身の安全を感じることなく、現地のハズラ人共同体や市外の遠く離れた場所（レンガ工場など）に身を隠したりした。

ヘラートで援助を求め、人種上の理由により順番待ちの名簿に載せられたり、援助を拒否されたと信じている家族もいた。出身地域は戦闘地域である場合が多く、戦闘員とみなされたり拘束されるのを恐れて、そのことについては話すのを避けていた。ヘラートにおいて、ハズラ人が人道的援助を受けることが、組織的に妨害されたかどうかは定かではない。しかし、ヘラートの国内避難民キャンプにおいてこの人種がかなり少ないことは特記すべきだろう。現地のハズラ人共同体は、地域で治安にかかわる事件があると、毎回特に標的とされている。中部地域から来たこれらの家族は、暴力行為や横行する差別に直面し、国境を越えて国外の同人種の難民共同体に身を寄せざるをえなくなる。

ほとんどすべての家族が、密入国仲介人と共に国境越えをしなければならなかった。国境をはさんだ両国に活発な密入国ネットワークがあることは確かである。遠くはガズニにいる仲介人までが接触を受けることもあった。仲介人は避難家族に同行し、検問所通過を手助けし、時にはある

程度旅した後で別の案内人に預けることもある。避難家族に所持金がないと、さらに金額を上乗せして借金も含めて別の案内人に売り渡される。

国境付近まで自力で行く家族もいるが、国境を越える時には密入国仲介人が常に同行する。国境を越えるとザーブルや周辺地域の家数に数日隠れていなければならないこともある。こうした家で他の新たな避難家族らと一緒にになり、トラックやバスでイランの主要都市(マシャド、テヘラン、クオムなど)へ移動するのを待つ。避難家族が何台かの車に分かれて乗る場合もある。途中、イラン警察に逮捕され、アフガニスタンへ強制退去させられることも多かった。自分の家族と離ればなれになると、再びマシャドへ行くため国境を越えようとした。2回、3回と国境を越えた者もあり、イランにたどり着いた時には多大な借金を背負っていた。

密入国仲介人は、ほとんどすべての家族に多大な金額を要求した。1人あたりの平均金額は800,000リアル(100ドル)を越えていたが、9月以来増額しているようである。1人あたり200ドル相当を払わなければならなかった家族もいた。合計10,000,000リアル(1,250ドル)を要求された大家族も数例あった。

支払いのために避難家族はわずかに残った所持品を渡し、それでも全額は支払えない場合がほとんどなので、仲介人は将来の支払いの保証として1人から数人、女性や子供の場合もあるが、手元に残した。避難家族の3分の1がこれに該当する。

家族が請求額の一部や全額を支払うと、人質は解放される。通常、イラン在住の親族やマシャドのアフガン共同体の人々から金を工面していた。多くの人質は数週間で解放され、それまでは家屋に閉じ込められたり、時には強制労働させられたりした。

面談した家族のうち、イラン領内に到着した時点で亡命を求めた家族はいなかった。どの場合も仲介人がマシャドまで同行していた。また多くの避難家族が国境で可能かもしれない亡命手続きについて知識がなく、逮捕後強制送還されるのを恐れていた。しかしいったんマシャドに着くと、417家族のうち75家族が、2000年に行われたイラン当局と国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)によるスクリーニングプログラムの際に、一時的な亡命を求めることにした。この75家族の亡命希望に対し、16家族が受け入れられた(13家族は、本調査における「迫害の被害者」、「迫害の恐怖」、「戦闘の被害者」に該当した)。7家族は却下され、残りは2000年12月に亡命プログラムが中断されたため、いまだ保留とみなされている。

イラン到着後の生活

現在のイランに難民申請の正式な手続きはない。そのためアフガン難民は、いつ逮捕、強制送還させられてもおかしくない状況にある。一方イラン社会において、アフガン難民は出稼ぎ者、時には犯罪者として見られている。こうした認識はアフガニスタンで現在起こっている様々な出来

事や迫害、暴力、飢餓の危険性から逃れるため故国をはなれざるを得なかった多くの難民の現実を見えにくくしている

避難家族は、すでに他のアフガン難民が住んでいる家に間借りをしている。どの家にも、穴を掘ったトイレと水道が備わっている。ほとんどの家に都市ガスが供給されている。1人あたりの居住面積は、どの避難家族でもおおよそ2.8㎡である。数家族が1部屋に住んでいることもあり、とくに到着後1週間はそのような状態が多い。避難家族の27%は複数の人間もしくは複数の家族と部屋を共有しなければならず、その場合1人あたりの居住面積は2㎡に縮小する。初期の段階で現地共同体との接触がなかった家族は、宿泊所や援助を得るまで数日間、グルシャルで野宿しなければならないこともあった。

ほとんどすべての家族が借金を負っている。その大部分は、イランに入国するために雇った密入国仲介人への支払いと、その後の日々の出費をまかなうための借金の積み重ねによる。グルシャルに到着した時点で、たいていは移動中にそれまでの貯えをすべて使ってしまった。主要な借金主にいくらかでも返済するために、避難家族は親族や共同体にいる裕福なアフガン人で、同郷の者に借金をすることが多い。平均負債金額は、3ヶ月前と6ヶ月前に到着した避難家族との間で大きな差はない。このことは、借金の返済に十分な収入の得られる仕事をイランで見つけるのが難しいことを示している。

避難家族570のうち、4分の1はまったく収入がなかった。収入源がある場合、1家族あたりの平均月収は9月の時点で192,000リアル（24ドル）だった。2000年12月には、1家族あたりの月収はわずか133,000リアル（16.5ドル）であった。収入源がある家族の4分の1では、14歳未満の子供も働いていた。

最も多いのは季節的な仕事で、ピスタチオの殻むき、サフラン摘み、レンガ工場での仕事、農作業などである。他には羊毛の洗浄、自宅でのじゅうたん織り、路上での物売りなどの仕事をする者もいる。冬になると職は少なくなり、若者や頑強な男性が建築現場や工場での一時的な仕事を見つかる程度である。来たばかりの人間は共同体との関わりがまだなく、外国人に対する労働規制強化により逮捕されるのではないかと恐れているため、仕事を見つかるのは一層難しい。1ヶ月前に到着した家族の70%はいまだ収入がなく、熟練季節労働者として働いているわけでもない。

共同体内には明らかに連帯感がある。少なくとも避難家族の43%が親族からの援助を受けており、隣人からは14%、慈善団体からは14%である。金銭や物資（衣服、食糧、その他の便宜）の援助を受けている家族もいるが、まともな生活をするには十分とはいえない。マシャドのアフガン共同体に親族がいるために、とくにこの都市に新たな難民がやってくることも多い。レザ師の聖廟があることもマシャドに定住する理由としてよくあげられる。

570 家族の 14%で、到着前の 1 年間に身内の者（両親、子供、兄弟姉妹）が死亡している。総数 3,002 人のうち 96 人が死亡しており、平均死亡率は 1 日あたり 10,000 人中 0.88 人とかなり高くなっている。9 月に面談した家族の半数で、戦闘により誰かが死亡していた（爆撃、暴力行為、地雷など）。

結論

アフガニスタンにおける人道的立場から見た状況が悪化するにつれ、新たな難民が毎日イランへと到着している。干ばつはアフガニスタンの人口の動きを大きく左右する要因となってきたが、多数の難民にとって主要な動機は、依然として身の安全である。特定の大きなグループ、とくにシーア派ハズラ人共同体に対して横行する暴力行為、略奪や迫害はますます広がっている。自国をあわただしく離れ、国境を越えようとして大金を脅し取られた多くの人々は、イラン国内でも最低限の生活すらできず、法律による身分の保証もない。

アフガンの人々の間に危急的状況が広がっているため、イラン国内の新たな難民への援助、亡命、保護を強化することが必要である。

1951 年の難民条約に基づいて難民の認定を受けられるのは、イラン当局のみである。これらの難民の中に認定の必要条件を満たす者がいくらかいても（そして条約で定められた法令上の保証が受けられるとしても）、その他大勢は、個人的な迫害、治安の悪化や戦闘、干ばつなどを逃れて来ているため、必要条件を満たさないことがある。

いずれにせよこのような『法令上難民でない者』に対しては、国際資金援助団体や救援組織の強力な支持を得て、イランイスラム共和国は UNHCR と協力し、最低限の処遇を供与すべきである。

UNHCR 執行委員会は、1951 年の難民条約の定義に当てはまらないために庇護が受けられない難民に対し、恒久的な解決法が見つかるまで、いかなる国も与えなければならない最低限の権利を定めた。イランおよびパキスタンなど周辺諸国へのアフガニスタン難民の大量流入が起こっている現在、アフガン難民は最低限の権利を受けるべきである。国際社会の断固たる動きがなければ、これを実行するのは難しいだろう。